

美術教育における鑑賞

殿河内恭子* 福田隆真** 川口政宏**

On the Appreciation in Art Education

TONOGUCHI Kyouko, FUKUDA Takamasa and KAWAGUCHI Masahiro

(Received November 30, 1992)

キーワード：美術教育、鑑賞、教科書、視覚リテラシー

1 鑑賞の意義と方法

美術作品を受容する側の見方、鑑賞とはどのようなものであろうか。鑑賞の意義とは何なのかを以下『美学／芸術教育学』（武藤三千夫、石川毅、増成隆士）を参考にして述べる。

美術作品の何に感動するのかということに関して、増成は次のことを挙げている。「まず純粋な快がある。作品は私達が単純に〈きれいだ〉と感ずることのできる快感を与えることがある。このような快感とは自然の美しさを目にしたときのものとほぼ同質のものであるといえる。」¹⁾美術鑑賞とはどのような過程を経るのであれ、結果的には個人の快に結びつくものであると私は考えるのだが、ここでいう〈単純な快〉とは、夕焼けの美しさ、食べ物の美味しさ、芳しい香りなどに触れたときの快、個人的レベルではなく、生物全体に共通するようなもの、いわば生理的な快に極近いものである。

写真かと思って側に近寄ってみると、実は緻密に描かれた絵画であった。このようなとき私達は当該の画家の人間離れした技量にまず驚きを感じる。このような感動は美術作品の鑑賞の際によくあるものである。画家の技の冴えに対する感動である。「美術においては〈独創性〉の意義がしばしば強調されるが、技術面での独壇場ということも鑑賞者に喜びを与えるものなのである」。²⁾この時、鑑賞者は、理想的あるいは極限的写実性を想定していて、目にした絵の写実性とを暗黙裡に比較していると思われる。これに対し、比較することのできない、いわば想像を絶するような作品、鑑賞者の世界の中にはない初めての世界を見せられたときに起こる感動、新奇性に対する感動がある。増成はこれら「美技（ファイン・プレー）を見る喜び」³⁾に関して前者を技量、後者を質的として、鑑賞者の感動の内容を分けて考えている。「自分が想像しなかった質的に新しいものについては我々はそれが他の人によって現実に提示されて初めてなるほどその存在に気付く。」⁴⁾このような新しさに対する感動は〈新奇性〉に対する驚きと置き換えられるかも知れない。「新し

* 山口大学大学院教育学研究科

** 山口大学教育学部

い技術といえども、全面的に新しいというのではなく、それまでの技術の継承と練磨、あるいは批判や変更などの延長線上にあるという場合のほうが多い。そうであるにせよ、しかし(略)いわば質的な新鮮さに関しての見事さが見られる場合もある。実際、特に個性的、独創的なものとして歴史に名をとどめている芸術的制作には多かれ少なかれそのような特性が見られる。」⁵⁾真に個性的、独創的といわれるものの内には、これまでに存在したもののみでなく、今初めて提示される、その画家が出発点になるような要素が含まれている。

作品に対して接点を持ち得ない人は、すでに生理的レベルを脱して、個人の差異に基づく反応をこの作品によって喚起されている。このような場合は、生理的、感覚的でなく、精神的な感動、喜びをこのような作品から得ているのではないだろうか。増成は鑑賞による精神的な喜びを<精神の旅>と捉え、「人間の想像力による旅行は、それ自体として楽しみの一つであり、それは我々の想像力が旅行を欲し、旅行を楽しむものであるからである。」⁶⁾という。風光明媚で名所の多い観光地がさしあたり多くの人々に好まれるのと同様、美術においても通俗的な名作は、新鮮味が長続きせず、飽きられやすい。また、繰り返しその作品に出逢うことでより深い喜びが得られるということもあまりない。旅行を、単に体を動かし、初めて見る風景に目を触れさせる感覚的なものから、個人の精神的レベルに引き上げるために必要なこと、それは事前に<知っておくこと>、それに尽きるのではないか。「美術鑑賞において、優れた作品は深い味わいの可能性を豊かに持っているが、この可能性を現実のものにするのに重要な役割を果たすのが、鑑賞者側の<知>である。精神的な喜びを得るには、私達の<知的>条件の豊かさが大切なのである。」⁷⁾

これらの鑑賞の意義に関連して、私達はどのような方法で鑑賞を行うのかを考えてみる。

①何が見えるか？

作品にはどのような材料が使われているか。どのようなものが描かれているか。

②作品はどのように組み立てられているか？

線や色、形態などがどのように使われているか。空間がどのように処理されているか。

③何が起きているのか？作家は何が言いたいのか？

作品の主題は何か。作家の感情はどのようなものか。

④この作品をどう思うか？

作品の題材は好きか。要素やその構成の仕方は好きか。作品に感じるものはあるか。

作品を鑑賞する際にこれら4つの方法は、私達が常に意識的に行っているというものではないが、私達はこれらの方法を部分的に、あるいはすべてを用いて鑑賞する。①～④の順どおりに鑑賞すると、作品に対してより分析的、客観的な見方ができよう。また逆の順序で鑑賞すると、見る人の感情、感覚、好みがより強く表われるであろう。⁸⁾

2 教科書の分析

日本の美術の教科書においては鑑賞がどのように扱われているのかを、美術科の教科書から鑑賞の部分抜き出して簡単に分析してみることにする。

(1) ①「美術1、2、3」(日本文教出版・平成元年版)

●1学年:

「感じ取る目と心」「デザインの心」「身近なものを見つめて」と3項目で鑑賞のページを設定している。「感じ取る目と心」では表現のもとになった作者の心の動きを読み取るように鑑賞させている。

・『明果』小倉遊亀 ・『トリエルの船』アルベール＝マルケ ・『餌食む猫』朝倉文夫

「デザインの心」では、コーヒーカップ・街地の案内版など多彩な例を挙げて、ものの分かりやすさ・使いやすさ・美しさについて教えている。

・絵本の表紙 エリック・カール ・コーヒーセット 森正洋 ・コンパス ヨハン＝クリスチャン＝ロッター (西独)

「身近なものを見つめて」では、身近な素材を扱った作品を挙げて作者の対象に対する観察力や深い気持ちを読み取らせるようにしている。

・『葡萄とペルシャ大皿』安井曾太郎 ・『子牛』アンドリュウ＝ワイエス ・『朝食』ピエル＝ボナール ・『ふくろう』(鉄)山本常一 ・『静物』(ブロンズ)ジャコモ＝マンズー

●2学年:

「主題と表現」「アイデアと制作」「工芸と工業デザイン」「個性と表現」の4項目が挙げられている。「主題と表現」では、考えることと表現することは一体であること、まず手を動かしてから表現に取り組むことの重要性が述べられている。「ピカソはキャンバスに向かってこれから絵を描こうとするとき何も考えていない」⁹⁾といったことを挙げ、考えることと表現することの一体化について教えている。

・『画家とその母』アーシル＝ゴーキー ・『小さな農夫』アメデオ＝モディリアーニ
・『赤帽の子』前田寛治 ・『騎手』(ブロンズ)マリノ＝マリーニ

「アイデアと制作」ではポスターとデザインされたスタンドを数例挙げている。魅力的なデザインは、新鮮なアイデアとそれを具体化する粘り強い制作の努力が一つになって生まれるものであるとして、アイデアの工夫と制作への情熱と努力の必要を教えている。

・日本舞踊のポスター 田中一光 ・卓上スタンド(プラスチック) 永原浄など

「工芸と工業デザイン」では、竹製の花籠から飛行機のコックピットまで幅広い図版を掲載している。またガウディによる曲線的なものから現代の直線的なものまで4種の椅子を挙げ、それぞれの良さと機能を考えさせるようになっている。この項目では社会的な要求とデザインの対応との関係が読み取れる。

・いす(木)ガウディ ・いす(スチール)ヘルベルト＝ロール(西独) ・花びん(焼き物)(デンマーク) ・旅客機のコックピット(米) ・ロビーチェア(日本)
・はさみ(焼き物・プラスチック)(日本) ・花かご(竹)生野祥雲齋

「個性と表現」では表現方法の異なる9つの図版を挙げている。作品に表われた作者の個性をその主題や技法に着目して鑑賞させるようになっている。

・『ラパン・アジュール』ユトリロ ・『遊蝶花』岡鹿之助 ・『古いバンジョー』ポール＝アイズピリ(仏) ・『さくらんぼ』浜口陽三 ・『腕を組んで座る軽業師』パブロ＝ピカソ

・『童女像(花を持つ麗子像)』岸田劉生 ・『郵便配達夫ルーラン』ビンセント＝バン

＝ゴッホ ・『女』（ブロンズ）萩原守衛 ・『破壊された都市のための記念碑』（ブロンズ）ザッキン

●3学年：

「作者の精神の拡がり」「デザインの拡がり」「ハイテクノロジーとデザイン」「環境と造形」「東西の美術」「現代の美術」と6項目を立てている。「作者の精神の拡がり」では作品に対する感想が出しやすそうな作品を4点挙げている。自然や社会の事象に対して敏感でありながらも、自分の本心をしっかり持ち続け、それを表現することの大切を教えている。

・『立てる像』松本竣介 ・『炎舞』速水御舟 ・『解放』ベン＝シャーン ・『カレの市民』（ブロンズ）ロダン

「デザインの拡がり」では、デザインすることの課題、即ちそれは機能や美だけではなく、自然や人間性の大切さを踏まえて未来の生活に本当の益をもたらすことなのだ述べている。またテレビやコンピューターなど、どんどん新しくなるデザイン分野の動きと多様性をも知らせるようにしている。

・大鳴門橋（徳島県・兵庫県） ・スペースシャトルのイラストレーション 嶋岡五郎
・成長する植物（CG）河口洋一郎 ・ヘリコプターの図（ペン画）レオナルド＝ダ＝ビンチ

・小児歯科医院の待合室（米）

「ハイテクノロジーとデザイン」では、先の「デザインの拡がり」を踏まえて新しい技術が新しい表現を生みだしている様を紹介し、その意味を理解させることをポイントとしている。またコンピューター・グラフィックスという全く新しい表現技法も特別に取り扱われている。

・『ポートピア・セレブレーション』山口勝弘 ・『宇宙と胎内』（ドーム）ヤマザキミノリと芸術本舗文殊 ・ワイヤーフレームの日本地図（CG）アドマックス ・『ガラスの森』（CG）日本放送協会 ・イラストレーション（CG）林弘幸 ・イラストレーション（CG）シンク・ラボラトリー

「環境と造形」では、庭園・案内版・ストリートファニチュアなど、私達が外でよく目にするものと環境との関係を考えさせるようになっている。またこれらは日常生活の中で直接鑑賞することのできる芸術作品である。ふと通りかかったとき、これらに静かに向かい合えるような心のゆとりを持つように教えている。

・庭園（館林市文化会館・群馬県）斎藤勝雄設計 ・美術館（滋賀県立近代美術館・大津市）

・案内板・標識（横浜市） ・広場（横浜市） ・ベンチ（東京都） ・『光と水と生命』（スタンドグラス）（大宮駅・埼玉県） ルードビッヒ＝シャフラット（西独）

「東西の美術」では図版とともに日本・中国・西洋の美術史略年表を載せている。図版は『源頼朝像』と『モナ＝リザ』、写楽とロートレックなどを並べ、東洋と西洋の表現法の相異点と共通点を左右の図版を見比べながら鑑賞できるようになっている。この項は4ページに渡っているが、3ページ目では横山大観とセザンヌを並べ、濃淡や余韻を持つ作風と形や色で図面を構築した絵とを比較させている。4ページ目は立体による人体表現の違いについて書かれており、古代ギリシャの人々と私達の祖先が仏像に求めたものの違いを述べている。

・虎塚古墳壁画（茨城県） ・ラスコー洞窟壁画（仏） ・『源頼朝像』藤原隆信 ・
『モナリザ』レオナルド＝ダ＝ビンチ ・『大谷鬼次の奴江戸兵衛』（多色木版）東洲
斎写楽

・『アンバサドゥール産のアリステイド＝ブリュアン』（石版）ロートレック ・『雨霽
る』（山十題のうち）（紙本墨画）横山大観 ・『大きな松の木のあるサント＝ピクト
ワール山』セザンヌ ・『ミロのビーナス』（ギリシャ） ・『月光菩薩像』（塑像・彩
色）東大寺法華堂 ・『哭』（木）本郷新 ・『安楽いす』（ブロンズ）ヘンリー＝ムー
ア

「現代の美術」も4ページが割かれている。様々なタイプの作品12点が挙げられ、個
性的で多様な展開を示す現代美術の様相を鑑賞させている。

・『レスタックの三本の木』アンドレ＝ドラクワ ・『ピエロ』ルオー ・『記憶の固
執』ダリ ・『セネシオ（野菊）』クレー ・『黄、赤、青と黒のコンポジション』モン
ドリアン

・『ゲルニカ』ピカソ ・『窓から』ジャスパー＝ジョーンズ ・『燃えるウラヌス』
ポール＝ジェンキンス（米） ・『二人の夜警』（鉄）リン＝チャドウィック ・『テン
ションとコンプレッションTC・351』（鉄铸件その他）篠田守男 ・『walk-don't
walk』（石膏その他）シーガル

(2) 「美術1、2、3」（光村図書・平成2年版）

●1学年：

「作品と語る」というタイトルで最初の見開き2ページで1点、最後の見開き2ページ
で2点を紹介している。「作品を語る（前）」はルソーの作品である。ルソーは熱帯地方
に行ったことはなかったが、写真などをもとに想像を加えて熱帯の密林を描いていたとい
うエピソードを添えて、想像を巡らせながら未知の世界で遊ぶような気持ちで楽しく鑑賞
できるようになっている。

・『異国風景』ルソー

「作品を語る（後）」ではゴッホと速水御舟の『ひまわり』を並べている。その表現方
法と2人の作者の心情、ひまわりに対する見方などの違いを比較するようになっている。

・『ひまわり』ゴッホ ・『向日葵』（絹本彩色）速水御舟

●2学年：

「作品を語る」の項が2つ設けられている。「作品を語る（前）」では岡鹿之助の作品を
1点挙げている。彼の描画法（点描）や秩序正しい構成の仕方、またそれを確立させた
きっかけ（スーラ、ルソー、ルドンから影響を受けたこと）などを挙げ、1人の芸術家、
またその作品について考えさせている。

・『波止場』岡鹿之助

「作品を語る（後）」では岸田劉生とモディリアーニの人物画を並べて配置している。
2人は表現方法や生まれ、育ちも違うが、モデルを見つめる暖かい目や人柄を捉えようと
する態度には変わりがないのだということが分かるようになっている。

・『村嬢於松之図』岸田劉生 ・『パイプを持った男』モディリアーニ

●3学年：

「作品と語る（前）」「作家の精神と表現」「芸術との出会い」「作品を語る（後）」と

4つの項になっている。「作品を語る（前）」ではゴッホの寝室を描いた作品を挙げている。自分の寝室の絵からゴッホの魂が感じられるこの絵で、作者の精神と表現のぴったりとした重なり合いの素晴らしさを鑑賞させるようにしている。

・『アルルのゴッホの寝室』ゴッホ

「作家の精神と表現」の項では4人の作家の歩んできた道とその作品の違いを挙げている。「優れた作家は自分が生きてきた時代をその目で見つめて、常に見事な作品を生みだす。殊に戦争のような苦しい時代の前後にはそういう例が目立つ」¹⁰⁾ということを挙げ、戦争を体験したことのない者には理解の難しい、苦しい時代を生きてきた人々の厳しい目や心、そしてそれが表現された作品を鑑賞させている。

・『禁じられた果物』国吉康雄 ・『立てる像』松本竣介 ・『牧歌・生きる喜び』ピカソ ・『棧橋の少女たち』ムンク

「芸術との出会い」は8ページを割いた美術史の項になっている。内容は「原始・古代の美術」に始まり、「人間の表現」「自然の表現」「生活の表現」「溢れる光」そして最後に「20世紀の美術」で締めくくられている。美術の歴史を追いながら、いくつかのポイントを設けて鑑賞させるようになっている。

「原始・古代の美術」

・ラスコーの洞窟壁画（仏） ・ミロのビーナス（大理石）（ギリシャ） ・ミラノ大聖堂（伊） ・法隆寺五十塔 ・弥勒菩薩像（木）（広隆寺・京都府）

「人間の表現」

・『アダム』（フレスコ）ミケランジェロ ・『モナリザ』レオナルド＝ダ＝ビンチ ・『自画像』デューラー ・『源頼朝像』伝藤原隆信 ・『大谷鬼次の奴江戸兵衛』東洲斎写楽

「自然の表現」

・『ミッデルハルニスの並木道』マインデルト＝ホッペマ（蘭） ・『月下に石炭を水夫たち』ターナー ・『秋冬山水図』（紙本墨画）雪舟等陽

「生活の表現」

・『雪景色の中の猟師たち』ブリューゲル ・『晩鐘』ミレー ・『東海道五十三次』（浮世絵版画）歌川広重 「溢れる光」 ・『睡蓮』モネ ・『木苺』黒田清輝

「20世紀の美術」

・『ブロードウェイ＝ブギウギ』モンドリアン ・『フーガ』カンディンスキー ・『ゲルニカ』ピカソ ・『シドニー＝ジャンスの石膏人体とモンドリアンの「構成」』シーガル ・『鶏』（ブロンズ）ブランクーシ ・『ナショナル＝ノート』菅井汲

「作品を語る（後）」では横山大観とセザンヌの山の絵を挙げ、東洋画と西洋画の違いを比較させている。

・『潤声』（紙本墨画）横山大観 ・『サント＝ビクトワール山とシャトー＝ノワール』セザンヌ

(2) 「美術1、2、3」（開隆堂・平成2年版）

「鑑賞」として目次には含まれていないが、表紙と裏表紙で幾つかの作品が鑑賞できるようになっている。表紙では作品の一部を近くで、裏表紙ではその全体を遠くから見た感じが味わえるように工夫されている。裏表紙では表紙の作品を他の作家の作品と比較でき

るようになっている。また、最初の見開きページでは全学年に渡って上半分に東洋画、下半分は西洋画を掲載して、その画風の違いが比較できる。1年では花、2年で山、3年で波、というように、1つの題材に絞って作品の一部を取り上げている。筆使いなど絵の細部がよく分かるように、そして次のページで全体図を見ることができるようになっている。

・『燕子花図』（紙本金地着色）尾形光琳 ・『花のつぼ』ブリューゲル ・『日月山水図』（紙本金地着色・六曲一双屏風）（金剛寺・大阪） ・『サント=ビクトワール山』セザンヌ

・『松島図』（紙本金地着色・六曲一双屏風）俵屋宗達 ・『波』クールベ

●1学年：

「美術の始源」という項を設け、原始・古代の美術作品を紹介している。ここでも西洋と東洋の作品を比較しながらそれらの素材で力強い表現を鑑賞させるようになっている。

・『野牛』（アルタミラの洞窟壁画）（スペイン） ・銅鐸（弥生時代中期） ・ラスコーの洞窟壁画（仏） ・千金古墳壁画（熊本）

●2学年：

「日本の美術」というタイトルでわが国の美術作品の描線や色彩、画面構成の特色を紹介している。また、時代による主題や様式の変遷も見渡せる。彫刻では仏像を幾つか挙げてその特徴を鑑賞させている。国によって仏像の表情が違ってくるようにもなっている。

・『源氏物語絵巻・竹河』（紙本着色） ・『鳥獣戯画卷』（紙本墨画） ・『秋冬山水図』（冬・紙本墨画）雪舟 ・『大はしあたけの夕立』（木版）歌川広重 ・『唐獅子図』（紙本金地着色・六曲一双屏風）狩野永徳 ・『金剛力士像』（阿形・木） ・ガンダーラの仏像（パキスタン） ・雲崗の仏像（石）（中国） ・『釈迦三尊像・中尊』（銅）（法隆寺・奈良） ・『阿修羅像』（乾漆）（興福寺・奈良）

●3学年：

「世界の美術」という1項目のみとなっているが、内容を「素材と造形」「人物の表現」「新しい美の創造」「ゴッホの芸術」「ゲルニカ」と分け、10ページを割いている。「素材と造形」「人物の表現」では共に東洋と西洋の彫刻・建築、そして絵画を比較させる形を採っている。「新しい美の創造」では20世紀の美術作品を6点挙げ、美術と社会の関わりを考えさせている。

「素材と造形」

・『ミロのビーナス』（石）（ギリシャ） ・シャルトル大聖堂（仏） ・法隆寺五十塔（奈良） ・『弥勒菩薩半跏像』（木）（広隆寺・京都）

「人物の表現」

・『モナ=リザ』レオナルド=ダ=ビンチ ・『エミール=ゾラの肖像』マネ ・『若い婦人の肖像』ドガ ・『源頼朝像』（絹本彩色）伝藤原隆信 ・『高島おひさ』（木版）喜多川歌麿 ・『鷹見泉石像』（絹本彩色）渡辺崋山

「新しい美の創造」

・『パリの通りの風景』リチャード=エステス ・『青と黒』サム=フランシス ・『時の蜃気楼』イブ=タンギー ・『頭部VI』フランシス=ベーコン ・『ざくろ』（板金・金属棒）カルダー ・『歩く男』ジャコモッティ

「ゴッホの芸術」では彼の生涯と作品を紹介している。1人の画家の表現の変遷を見ながら彼の人間性や彼が生きた時代の背景を読み取らせるようになっている。

・『タンギーじいさん』(1887-1888) ・『馬鈴薯を食べる人々』(1885) ・『はね橋』(1888) ・『自画像』(1890) ・『ひまわり』(1888)

「ゲルニカ」では、ピカソという作家にはあまり重点を置いていない。それよりも不安や怒りといった激しい感情を彼がどう表現したか、作品からそれを感じ取らせることにポイントを置いている。

(4) 「少年の美術 1、2、3」(現代美術社・平成2年版)

●1学年：

「絵が分かるとは何か」では、エゴン・シーレの鉛筆画を取り上げ、絵は公式に当てはめて見たり描いたりするものではなく、自分の方法で心に感じたことを表現するものだと説明している。作者の表現したかったことを探すように心を働かせて鑑賞させるようにしている。

・『街の浮浪児』(鉛筆) エゴン・シーレ

「若き日のピカソ」ではピカソの初期の作品を取り上げ、その頃のピカソの生活や様子を述べている。また他の画家を含め生存期間を示した年表を配している。ピカソは若いころ苦しい生活を送っていたが、生み出された作品はしっかりとした形態と美しい色彩を持ったものである。それはピカソの貧しい人々に対する共感と深い愛によるものである、と教えている。

・『裸足の少女』(1895) ・『二人の軽業師と犬』(1905)

「デザインとは何だろう」では、ノーマン・ロックウェルを取り上げている。この作家を取り上げた理由として、現在のデザインが彼のような精神を忘れてきているからであることを挙げる。彼は、デザインとは、それが人間をより良く生かすために、自然が持っている暖かさで人間を豊かにするためになされるのだと考えたのである。40年も前の作品を取り上げることで、現在のデザインに対する考え方に問いを投げ掛ける形になっている。

・『四つの自由』(4点)(1943)

「木の生命」は法隆寺の廻廊と観音像の一部の図版を載せ、木という自然素材の生命力の強さを学ばせている。

・法隆寺回廊 ・『百済観音像』(法隆寺)

「ピカソとその作品」では、自画像(表紙)と様々な素材で作られた『やぎ』(裏表紙)について解説を加えている。先の「若き日のピカソ」と内容的には重なっている。

●2学年：

「ものに隠された自然を見つけよう」ではベン・シャーンの商品『ピーターと狼』(2人の子供が仮面を付けて向かい合っている絵)を取り上げて、ものを描く場合の外形と内面について述べている。表面のみを見るのではなく、そのものの成り立ちに働いている摂理への視線を鋭くすることの大切さを教える形になっている。

「ゴッホの手紙」は、ゴッホの7点の作品と彼が自分の作品や美術について触れている手紙の抜粋とで構成されており、作者自身による作品解説になっている。作品のみでなく手紙からも彼の人柄や考え方が窺えるようになっている。

・『黒いフェルト帽をかぶった自画像』(1886) ・『ゴーギャンの椅子』(1888) ・『馬

鈴薯を食べる人々』(1885) ・『星月夜』(1889) ・『籐椅子に座るムスメ』(1888) ・『花びんに14本のひまわり』(1888)

「彫刻の歩みの中で」は、日本とエジプトの彫刻を比較して、時代や環境の違いが作品にどのように表われているかを鑑賞させるようになっている。

・『運慶』(木造彩色)(興福寺) ・『村長像』(木造)(エジプト)

「道具と職人の話」では玄翁(げんのう)と鉋(かんな)を取り上げ、人間の手としての道具を紹介している。優れた道具とはどのようなものかを考えさせる内容になっている。

「鬚光とその作品」では、鬚光の経歴と作品を2点(表紙と裏表紙)挙げています。彼が生きた厳しい時代とそれが反映された作品を読み取らせるようになっている。

・『自画像』(1944) ・『鳥』(1940)

●3学年:

「絵を読む」ではマネの『フォーリー＝ベルジュールの酒場』を取り上げている。多くのものが描かれた作品をじっくり見て作者の視点の変更を読み取らせようとしている。「鏡を持ち込んだ絵の世界」ではヤン・ファン・アイクの『アルノフィニ夫妻』とベラスケスの『宮廷の侍女達』の2点を取り上げている。彼らがどうして鏡を作品に取り入れたか、その効果はどのようなものなのかを鑑賞させている。かなり詳しい説明が加えられている。この項の内容は前項のマネの作品にも通ずるものである。またベラスケスの作品については解釈が分れているということも挙げ、模型による実験も行っている。「ワイエスの世界」ではワイエス自身の文章と作品を扱っている。彼の自然に対する厳しい態度、またそれがどのように生まれたのかを深く考えさせる内容になっている。

・『1946の冬』(1946) ・『おやじさん』(1948) ・『小屋』(1959) ・『クリスティーナの世界』(1948)

「セザンヌの世界」ではセザンヌ独特のものの捉え方を学ばせる内容となっている。また彼の画風の変遷を辿りつつ、印象派・キュビズムといった美術のカテゴリーにも触れている。

・『果物、ナプキン、ミルク差しのある静物』(1880) ・『木々』(1900) ・『サント＝ビクトワール山』(水彩)(1902-6)

「<使う>ということ」では酒瓶と醤油瓶とを並べた写真を載せている。2つは瓶の肩の部分の膨らみがほんの少し違うだけで、それは手に持ってみて初めて分かる程度のものである。なぜそのような微妙な違いを付けたのか、実際に使う場合を想定したものの作り方を考えさせる。

「セザンヌとその作品」では表紙作品と裏表紙作品2点について解説がなされている。

・『ジェクロワの肖像』(1895) ・『自画像』(1880-94)

以上教科書の鑑賞の際のポイントをまとめた。鑑賞の分類としては、以下の6つが挙げられるが、¹⁾教科書の鑑賞のポイントも次のように要約されるであろう。

- ①造形の動機から
- ②造形の要素・形式から
- ③造形の素材と技術から
- ④造形の感情・美性格の相違から

⑤風土・民族性から

⑥美術の歴史から

この6つのポイントのうち、作者の制作動機や対象の捉え方に着目する①や②では、美術に関する知識的な鑑賞と感覚的、直観的な鑑賞の両者が要求される。③⑤⑥は、美術あるいは美術の歴史に関する知識に重点が置かれるものである。そして④は知識的ではなく、美的な感覚での鑑賞を要求するものである。では美術鑑賞における知識、感情、直観といったものはどのようなものなのかを次章で検証する。

3 直観的鑑賞と知的鑑賞

ユングは、各個人は各々最も得意とする心理機能を持っていると考えた。¹²⁾心理機能とは、種々異なった条件の基においても原則的には不変な心の活動形式であって、ユングはこれを4つの心理機能に分けた。それは思考、感情、感覚、直観である。

さて、美術の鑑賞を考えた場合、感覚と直観は、まず何かを自分のうちに取り入れる機能であるのに対し、思考と感情は、それらを基にして何らかの判断を下す機能である、というように考えられる。ある対象の色や形、それを直接知覚し認知するのは、感覚・直観という非合理機能であり、思考・感情、即ち合理機能は、それについて概念規定を与えたり、良し悪しを判定したりする。この場合の非合理とは、理性の枠外にあるという意味である。感覚と直観は、表われてくるかぎりの事象を、ともかくそのまま知覚することを本領としている。その後の評価や方向づけといった意識的な部分にまでは関与しないということである。

直観とは「そう感じたからそう」なのであり、理由付けの出来ないものである。しかし、直観のみに頼ったものの見方は、その物に対する理解を深めよう、というような態度を排除する傾向を強めやすいのではないだろうか。直観型の人が、その結論を推論や事物の観察によって得られたように思い込んでいる場合が多い。しかしその説明を良く聞くと、先行した正しい結論に未分化な思考が後で被せられているに過ぎないことが分かる、¹³⁾とユングは述べている。

美しさを感じる目は、その対象を見るか見ないかに左右されるといえよう。いかに多くのものを見るか、気付くかということである。美術作品を考えた場合、例えば美術館の一つの作品を多くの人が見る場合であるが、この場合は、見る対象はすでに限定されており、対象に気付かないということはない。しかし、作品の中ではまた多くの要素が含まれており、その中のどれを意識的に知覚できるかは千差万別である。ある人は作品全体を見た段階で何らかの印象を受け、その時点で見ること満足してしまうだろう。そして、ある人は作品を注意深く見ることで作品の中の多くの要素に気づき、新しい発見をしたり、その美しさに感動したりするであろう。ここで前者は「直観的鑑賞」そして後者は「知的鑑賞」をしているといえるかもしれない。

直観的な鑑賞は、作品の全体的な印象、すなわち楽しい、悲しいなど「…な感じ」を直観的に感じ取ること、あるいは作者の精神、感情、心情を感じ取る鑑賞である。これらは見る人の精神状態にも左右され易いものである。一方、知的な鑑賞は、作品が作られた社会的、文化的背景、作者の生涯、また作品を成立させている要素、すなわち構図、色使

い、線などの視覚的要素を理解したうえでの鑑賞である。知的理解に基づいた鑑賞は、見る人の条件にあまり左右されることはなく、常に安定した客観的な印象をもたらすであろう。ここでどちらの鑑賞の姿勢が望ましいなどと言うことはできないし、また言う必要もない。しかし、先にも述べたように「ものを見る」ということは意識的に行われる行為である。多くのものに注意を払い、気付く、目に留めるということはまた、直観的な鑑賞を強め、新しい感動をもたらすであろう。対象を分析的に見ることは直観的な印象を損なうと言われる向きもあろうかと思うが、決してそうではない。知的理解は、直観的理解をより高め、客観性を持たせ、それが鑑賞者の一部になることを促すものである。

4 視覚リテラシー

視覚によるコミュニケーションは、言語のような国際間での隔たりがないため普遍性を持っているといえる。視覚的表現は、言語的な表現では覆いきれないような様々な感情や感覚の表現を可能にするし、また、他の人の手による表現を鑑賞することで、自分の内的な感情や感覚を客観化することができる。そしてそれは、それぞれの個人的感情や感覚を他の人と共有したことになるだろう。「筆舌に尽くしがたい」とか「言葉では言えない」というような体験や感情がしばしば生ずることを考えると、視覚言語の力によって「言えない」部分を見事に表現した芸術家の力量に私達は驚嘆し、感動を覚えるのである。彼は、たとえそれが主観的なものであるにしても、視覚要素に意味を与え、それらを構成し、ある種の感情やメッセージを見るものに伝えたことになる。

作品と向き合うとき、私達は作者という一人の人間と向き合っていると言ってもよい。作品と対話するにはまず、作品の、作者の語りかけに耳を傾ける必要がある。つまり注意深く見ることである。視覚リテラシーによってこのことはよりスムーズになる。作品によっては何をどう見ればよいのか分からない場合もあるが、視覚リテラシーによってその端緒を掴めるという可能性もある。

5 まとめ

教科書の鑑賞のポイント、指導要領の鑑賞の意義を見てきた上で言えるのは次のようなことである。

①「美術による教育」的側面が強調されている傾向があること。作品を鑑賞することで愛や真実、美しいものや崇高なものに感動する心を育てることを意図した鑑賞指導が多く見受けられる。これは現代美術社の教科書に顕著に見られる傾向であるが、鑑賞による一種の道徳教育になっている。確かに美術教育は最終的には完成された理想的人間像へ結びつくべきものであるが、最終目標を強調し過ぎる向きがないだろうか。「美術教育は、本来担っていた広義の道徳教育から、芸術教育の意義を主張するようになる。美的教育を美を育む教育というように柔軟に定義するとすると、それは造形教育は造形美の面から担う芸術教育と言える。」¹⁴⁾ 優れた芸術作品には作者の豊かな人間性が現われていると同時に、それは造形的な面でも優れている。芸術教育は美的教育であると共に造形教育であ

る。作者は様々な造形要素を慎重に構成して作品とする。その真剣な取り組みには、道徳的な教育の要素と共に常に注目させる必要があろう。

②視覚言語を単独に扱った単元が設定されていないこと。視覚言語の基本的要素は、点、線、形、方向、明暗、色、テクスチュア、大きさ、奥行き、運動などである。¹⁵⁾これらの要素は最も基本的なものでありながら、それ自体ですでに美的なものである。美術はこれらの要素を活用する人間の表現の一方法である。ゲシュタルト心理学により明らかのように、人間は不規則で複雑な図形をより規則的でより単純な、つまりより良い形態の図形として認める傾向がある。人間の知覚は、外界の忠実な模写ではなく、外界におけるより良い形態の認識なのである。知覚対象が不均衡であるとき、もっと良い均衡を要求する感情が経験される。実際視覚的な基本的要素のみで構成された作品は数多い。音楽は一つの音、つまりもっとも単純な構成要素のみでも十分に美しさを感じることができるし、それらがいくつか集まったもの、和音もまた何らかの美しさを感じさせ、感情を生じさせる。和音の中の一つの音が変わっただけでまた違った印象が生じる。私達は虫の声にも美しさを感じるのである。同じように色にも線にもそれぞれ表情があり、印象がある。ミロの作品は音楽でいう音や和音、リズム、ハーモニーを感じさせるし、ミロ自身もそのことを意識して造形、構成を行っていると思われる。開隆堂の教科書は視覚言語に関しては重点を置いているようである。比較鑑賞の方法を採った単元がいくつかあるというところから、客観的に視覚言語の分析ができるよう配慮がされていることが感じられる。しかしそれは作品全体を分析的に鑑賞する際の扱いに留まっている。

③現代芸術作品の制作理由を現代社会との関連において捉える面が強調されていること。現代芸術は今までにないほどの多様な表現を可能にした。その中にはもはや従来の美術に関する領域では捉えられないようなものもある。芸術の表現を多様化させた要因に現代社会の急激な発展と混乱が考えられよう。美術表現は一部では非常に個人的な感覚によって行われ、見るものを混乱させる。そのような作品は、これまで私達が芸術に求めてきた普遍的、絶対的な価値などは存在しないのかもしれない。

2で取り上げた4社の教科書は現代美術に関して鑑賞のポイントを「多様な表現を知る」「美術と社会の関連」の二点に絞っている。確かに現代社会は深刻な問題を抱えている。しかし表現の多様化の要因はその深刻な部分のみではないのではないだろうか。私達が生きている「今」の状況を正しく認識することは重要である。もっと視野の広い現代美術の捉え方が必要なのではないだろうか。

注

- 1 武藤三千夫 石川毅 増成隆士「美学／芸術教育学」 1985 勁草書房
- 2 前掲書1 p36
- 3 前掲書1 p42
- 4 前掲書1 p44
- 5 前掲書1 p45
- 6 前掲書1 p46
- 7 前掲書1 p49

- 8 「美育文化」1991年9月号 pp.12-15 『「見ること」と「作ること」をつなぐ鑑賞教育』ふじえみつる参照
- 9 「美術2」 1989 日本文教出版 p4
- 10 「美術3」 1990 光村図書
- 11 川村善之 江口善之 「テーマによる美術鑑賞事典」1990 日本文教出版
- 12 河合隼雄 「ユング心理学入門」 1967 培風館 p7
- 13 前掲書11 p55
- 14 真鍋一男 宮脇理監修 「造形教育辞典」 1991 p5
- 15 D・A・ドンディス 「形は語る」 1979 サイエンス社 p46

参考文献

- ・宮脇理監修 「新版 美術科教育の基礎知識」 建帛社 1991
- ・堀内守編 「芸術と教育」 講談社 1981
- ・真鍋一男 宮脇理監修 「造形教育辞典」 建帛社 1991